真夜中から黎明まで

豊島与志雄

時の区劃から云えば、正子が一日と次の日との境界であるけれども、徹夜する者にとっては、この境界は全く感じられない。彼にとっては、午前二時頃までは前夜の連続である。遠い汽笛の音、空気の乱れ、何かしら動いてるもののどよめき、一日の生活の余喘、……それらのものが大気中に漂っている。試みに戸外へ出てみよ。星の光はまだ人に親しみの色を帯びており、街路の空気には人の息が交っていて、帰り後れた飄々乎たる人影が犬と共に散在している。

そして午前二時頃から、深い沈黙と睡眠とが万象の上に重くのしかかってくる。凡て夜を徹する人々が――

―遊戯に心奪われてる者や仕事に縛られてる者などを除いて――何となく起きてるのを堪え難く感じだすのは、この時である。四五の友人相集って談笑しているうちに、ふと言葉が途切れ心が沈んで、薄暗い影に鎖されるのは、この時である。地上のあらゆるものが鳴をひそめ息を凝らして、石のように冷く固く沈黙してしまい、空気が重々しく淀んでき、星の光が空の奥深く潜んでいく。そしてこの死のような静寂のうちに、天と地とに跨る大きな影が垂れ罩めて、月のある夜は月の光を、月のない夜は夜の闇を、嵐の夜はその雨風を、超自然的な帷のうちに抱きすくめる。その帷の襞

や裾の奥から、無数の神秘な眼がじっと覗き出す。凡て物影に潜んでいるもの、人の眼につかないもの、形も色も音もない幽鬼の気、この世のものでないものが、空に地に浮動し彷徨する。而もそれはただ魂に感ぜらるるだけで、其処から来る魂の慴えも手伝って、官能の対象たる沈黙と静寂とは、層々とつみ重った深みを倍加する。地上の生ある物皆は、人も獣も草も木も、そういう深みの底に沈み溺れて、蠱惑的な窒息に眠り入る。それはまさしく、寂滅の時、逢魔の時、呪咀の時、丑時参りの時刻である。露や霜も降りるを止める、時間も歩みを止める、死と神秘との時間である。ただ

時計の針の止らないのが不思議である。

そして、冬ならば四時頃、夏ならば三時頃、突然或る物音が響く。身震いに似た木の葉の戦き、ぽーと尻切れの汽笛の音、無意識的な犬の遠吠、または何物とも知れぬ擾音、それらの一つがふいに何処からともなく起ってくる。それが相図である。沈黙と魔睡との底に凝り固っていた万象が、一斉にぞっと総毛立ってくる。星の光がぎらぎらとした凄みを帯びる、月の面がまざまざと磨き澄される。或は濃く淀んだ闇がむくむくと動き出す。空気が恐ろしい勢で徐々に流れ出す、或は風の方向が一息に変る。そして地上のあらゆるも

のが震えながら肩を聳やかす。無生のものが生の息吹に触れて恐れ戦くに似ている。斯く天地万象が総毛立つと共に、蠱惑的な鬼気は物の深みに姿を潜めてしまう。それはただ物凄い時刻、まだ形を具えない恐怖と歓喜との渾沌たる時刻である。復活の戦きの時である。

その戦慄が暫く続くうちに、ふっと、全く何故ともなく凡てが消え去る空虚の時が来る。眼覚めながら息をひそめた時刻である。万象がむくむくと起き上りかけてまたとろりとやる時刻である。もはや其処には生も死も何物もない。月や星の光もぼやけ、闇の黒さも艶を失い、大地の上を押し渡る微風も息をつき、あら

ゆる物音が消え失せる。万象の律動がぴたりと合ったその隙間である。徹夜の者が最もひどい打撃を感ずるのは、この時刻に於てである。もはや口を利くことも、仕事を続けることも、起きてることまでが、堪え難い努力となる。天地がほっと眼覚めの息を吐きつくして、何故ともない躊躇のうちに再び息を吸い込みかねている、全く空虚な合間である。

　そして俄に、輝かしい而もまだ仄かな交響楽が、何処ともなく起ってくる。空には星の囁き、地上には遠く応え合う反響、そして一際高く、鶏の声、車の響、汽笛の音、それらの底に籠ってる人声。一時のとろり

とした仮睡からはっと眼覚めて起き上る、万象の寝間着の衣摺れの音である。仄暗い夢と輝かしい幻とが入れ代る気配である。新たに立上ってくるその幻は、物の隅々まで訪れて、凡ての閉じてる眼を見開かせる。爽かな空気が空に地に流れる。草木の葉末には露や霜が繋く結ばれる。夜を徹してる者は、じっと坐についておれなくなって、故もなく立上って歩き出す。そして試みに窓を開けば、東の空には薄すらと紫の色が流れていて、それが見る見るうちに紅色を帯びると共に、遠く聞えていた仄かな擾音が、いつしか騒然たる反響に高まってきて、人の足音、小鳥の歌、星の最後の閃

めき、そして地上の万物が、蒼白い明るみのうちに形を浮出して、その上を、触れなばさらさらと音を立てそうな爽かな空気が、夜の闇と夢とを運んで流れてゆく。立並んだ人家はまだ黙々と眠っているけれど、その中に在るものは、もはや夜の夢ではなくて、新たな一日の幻影である。空には清い日の光が放射し、地上には輝かしい生活が初められている。

底本：「豊島与志雄著作集　第六巻（随筆・評論・他）」
未来社
　　　１９６７（昭和42）年11月10日第1刷発行
入力：tatsuki
校正：門田裕志
２００５年12月７日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。